

## 【講演】「図書館から広がる地域おこし 那須塩原市の未来を考える」

(伊藤)

UAo 株式会社代表の伊藤麻理です。私は建築家です。今日はですね、栃木県的那須塩原市で図書館の設計をしております、その話をメインとして図書館とランドスケープをどうよくしていくのかというところを中心にお話ししたいと思います。

簡単に自己紹介させていただきます。私は、栃木県的那須塩原市出身なんですね。その後に東洋大学を出て、オランダの設計事務所で働いて、日本に帰ってきて独立して自分の会社をつくっています。5年前に石川県小松市のサイエンスヒルズこまつという建物を建てたのですが、これがまさに建築とランドスケープを融合させた建築なのですね。とても見た目にわかりやすく、コンクリートと緑というものを融合させて、あたかも公園のなかに建築があるかのような、そんな建築をつくりました。おかげさまで BCS 賞とか内外からたくさんの賞をいただいて、融合がとても美しいということで評価をされました。ただ、この設計をやっているときにすごく思ったのが、建築はいい、ただそのあとに訪れる人たちにとって、まちの人たちにとって、本当に使える施設や活動的な場所になっているのか、というところがちょっと疑問になったのです。建築って、モノは建てられるけれどその後は運営者次第なので、どこまでそこを一緒に議論をしながらいいものをつくっていくのかというところが重要だになって、このときにものすごく思いました。実際は運営も頑張っているのですが、やっぱりどこか建築家が意図した、想定した通りにはなっていないところも多々あるんですね。まあそれは勿論いいんですが、改善して使いやすいようにしていってもらっていいんですけども、やっぱり腑に落ちないところがすごくありました。そこで、今回の那須塩原市の図書館では、その辺を改善して市民と一体となってよりよい建築をつくっていききたいなという思いがだんだん強くなりました。

那須塩原市の図書館は、公共施設なので建築はコンペだったのです。3年前に栃木県の黒磯の駅前の場所が、いわゆる商店街のシャッター街だったのです。それを地方復興の補助金を使って再生させようというプロジェクトが立ち上がりました。市民の皆さんから多く上がったのが、交流する場所がないから交流する場所が欲しい、じゃあ交流する場所があって、本当にそれで交流するかという話もあったので、市民の皆さんが出した答えというのが、図書館が欲しいということになったんですね。交流センターと図書館を二つ別の敷地でつくろうというのが、那須塩原市で決定されました。

黒磯の駅前を復興させよう。(スライド：黒磯駅前の地図)これが黒磯の駅前で、この緑が商店街で割と30年前と変わらないようなそんなトラディショナルな雰囲気があるのです。そんな駅前のここがちょうど図書館になって、ここが交流センターになると。この二つをメインとして復興していこうという計画になっていました。われわれはコンペに参加して、提案した会社が156社、そのなかから一番を取らせてもらいました。もちろん、地元だったのでごい力が入って、もちろん名前も伏せられている状態だったので、そこで審査に対しては公平はありました。われわれが提案したのは、ただそこに建築をつくるだけじゃなくて、市民が本当に使える施設とするためにはどうしたらいいのか、また図書館なので、ある世代だけが使う、ヘビ

一ユーザーだけが集まる場所ではなくて、小さなお子さんから高齢者まで、あらゆる世代がそこで交流しないと交流エリアにならないと思ったので、いろんな世代がちゃんと使える図書館をつくりたいっていうのをすごくコンペでいいました。というのも、今ある黒磯図書館を訪れたときに思ったのが、昼間誰もいなくてがらがらなんですね。朝は年配の方が新聞を読んでいると。昼になるとお母さま達がいらっしゃると。夕方になると勉強する学生だけなんですね。簡単にいってしまうと、年間何人の人がここを使ってくれるのだろうかというような第一印象だったのです。これをどう活性化させて、誰もが、普段図書館に来ていない人たちを呼び込むか、というのがすごく一番の課題かなというふうになりました。私は黒磯で生まれ育ったのですが、正直黒磯図書館に行ったことが、1回か2回くらいしかないんですね。それなんでかっていうと、すごく単純な理由で、読みたい本がないし、私勉強がすごく嫌いだったので勉強するためにも使わないし、誰がなんのために図書館って使ってるんだろうって、正直小さい頃から思っていました。このコンペがきっかけで、世界中の図書館から日本の図書館もだいたい50近くまわらせていただきました。そのなかで一つの答えに辿り着いたのが、わかりやすくいうと、実際使っている人がヘビーユーザーだけで、結構使っていない人が多いんだなということを感じました。じゃあその使っていない人たちがここへ来て、活動的になって、なにかを学んで、自分の将来のために活かしてもらえるようになりたい、そんな施設にするためにはどうしたらいいのかということを感じて考えるようになりました。

那須塩原市がですね、基本計画としてこういったことを打ち出しました。『人が集まり新しいことが生まれる図書館』をここに作ります』と。これ上位計画なんですけども、コンペのときにもこの情報が出ていて、これを満たすような建築をつくってくださいという要綱でした。これを見て、すごく素晴らしいなと思いました。ちゃんと地域の特徴、大谷石だったり、実はカフェが結構黒磯駅前有名で、割と地元の人が地域の環境とか素材とかを使って建築しているカフェが多く、ショウゾウカフェ (NASU SHOZO CAFE) とか、あとは市民の皆さんが結構活動的で、夜市も駅前でやっていたりとか、朝市やっていたりとか、夏はキャンドルナイトとか、年間の駅前の活動計画をみると毎月なにかをやっているのですね。だから活動する市民はすごくたくさんいるということを感じました。なのでこういうことをもし本当に実現したら、実際使う市民も多いし、なにかきっかけが与えられれば、駅前がすごく活性化するのはないかっていうことを思いました。

そのなかでじゃあ建築でなにを提案しようと思ったときに、「サイエンスヒルズこまつ」で気づいたのですが、建築つくっただけじゃいけないんだ。そのあとどう使われていくのか、どうあるべきなのかなと考える必要はないかと思いました。そのなかで私が提案したのは、公園って人が集まるじゃないですか、なんかふらっと来て。公園のいいところは、無料だし、そこでごろごろできて、日向ぼっこしたり、木の下で本を読んでいる人もいるし、かと思えば、グループで漫才ごっこしていたりとか、ボール遊びしていたり、そこでさまざまな活動がOKなのです。だから、みんな好んでそこへ行くし、リラックスすることができる。そういった行為を図書館のなかでつくってあげられれば、誰でも来るんじゃないかと思ったのですよ。小さい子から、高齢者、あとは学生さん、あらゆる世代が集まるのは公園かなと思ったので、公園と同じ環境をつくってあげようというのが最初のスタートでした。

じゃあこういう環境をどうやって建築でつくるのか、というところで私たちが一番最初に考えたのは、森があって緑があって、葉っぱの隙間から光が降り注いでいる、木漏れ日が入る。葉っぱの隙間から光が降り注いで木漏れ日がある、まずそういった環境を建築でつくってあげようと思いました。そこではフレッシュな空気が流れてなおかつ、もちろん明るいところもあるし暗いところもあるし、葉っぱがあるところはちょっと低い落ち着いた空間にもなるし、「ぼん」と空が抜けると、そこは天井が高く太陽が燦燦と降り注ぐ。そんなふうに見上げたときの高低差とか光の入り方とか、そんなところを建築でつくってあげれば、公園の森の下で本当に本を読んでいるような、そんな環境がつかれるのではないかと思いました。そういった環境をつくれれば、自然にみんなリラックスして活動が生まれるんじゃないかなって。建築がやってあげるのはそういう、まず環境をつくってあげようというところからスタートしました。

そして考えたのがこれです（スライド：木漏れ日の差す木々の下で人々がさまざまな行為をしているイラスト。葉の部分と幹の部分の境目にラインが引かれている）。まさに森があって、木漏れ日があって、その下でさまざまな行為がある。見上げたときというのは、葉っぱのこういうガタガタしたラインがあって、これ、われわれリーフラインと呼んでいるんですけど、このリーフラインを建築でつくってあげて、そこから光が入って、本当に森の見上げたようなシルエットをつくってあげれば、森のなかで本を読んでいる環境がつかれるんじゃないかと思ってこういう建築になりました（スライド：リーフラインを模した屋根のある建築模型の画像）。これをリーフラインと呼んでいて、ここから光が入ってきて、天井の高い所、低い所、あるいはちょっと籠れるような場所があったりとか、そんな建築をつくろうと考えました。

黒磯駅前なのですが、（スライド：黒磯駅前の航空写真）商店街があって、こちらに住宅街があって、ここにスーパーがあって、奥が黒磯高校へ行く道なのでですね。1日にこの駅使う人数ってたぶん数百人程度です。下手したら人がほとんど歩いていないような駅です、簡単にいってしまうと。人口は11万人いるのですが、やっぱり車社会なので、歩いている人というのは、黒磯高校に通う隣町から来る人が朝ここを通過して、あと住宅街からスーパーへ行く人がここを通過しているくらいなんです。そうすると、この図書館というのはちょうどそういう人たちの通り道になるのですよ。なので、通り道を邪魔しないでそのまま建築をつくろうと思いました。スーパーへ行く通り抜けの道、黒磯高校へ通う通り抜けの道。駅があって、住宅街から通り抜けられる。この大きなアベニューと呼んでいるんですが、この通りをつくってあげて、その周りに小さなストリートができています。そんな平面を考えました。その間をバイパスっていったらあれですが、散策路ですね。森のなかって直線の道ってないじゃないですか。ぐねぐね曲がった道をぐるぐると歩いているといろんな場所に行き着く。なので同じように、道をランダムにつくってあげて、迷い込むような、そんな空間をつくってあげようと思いました。そのなかにですね、緑の森のポケットというふうにわれわれは呼んでいるのですが、森を歩いていくと、ところどころ葉っぱが途切れてそこに光が入り、そこを見上げると空がある。そんな状況をとところどころ散りばめてあげる。そうすると、本当に森のなかにいるような、光のグラデーションとか、光のリズムがつかれるので、そんな環境をつくってあげる。この森のポケットがいわゆる、なにをしてもいい場所になっていくんですね。

スライドは図書館の1階の平面図です。こんな形で通り抜ける道があり、森のポケットと呼ばれるものが貫入していて、残りが基本的なスペースになっています。その森のポケットというのは機能をもっていないです。機能をもっていないくて天井見上げると吹き抜けになっていて、とても明るい場所になっています。1階が道になっていてその周りにたまたま本棚がある、この本棚もハの字にランダムになっているのですが、なるべくグリッド状にならないような工夫をして、なるべく森のなかに迷い込んだような状況をつくってあげるようにしています。なおかつ壁で仕切らないということを徹底しています。空間どうしをなるべく壁で仕切らない。なんでかというともう簡単な理由で、森に壁ないじゃないですか。やんわりお隣どうしがみえたりするので、この図書館も同じように、最低限のところは壁がありますが、基本は壁がないようにしてあげて、巨大なワンルーム、本当に森のなかにいるような状況をいかにつくるかということを徹底しました。

スライドは多目的ホールです。これは道からみたパースですが、道に対して本棚をハの字に開いています。これはなんでかという、外から図書館のなかの活動がみえるようにしてあげる。要は、壁をつくってクローズにしてしまうと図書館の活動がみえなくなって入りづらくなってしまいますので、単純に外と連動してあげることで入りやすくする。なおかつどんな活動をしているのか、興味をもって入ってきてくれる人がたくさんいたらとよいなと思うので、なるべく面出しの状態ではみえるようになっていて、あとはイベントでこの空間の貸出ができるので、グループでなにかイベントをやりたいってときにはここを全部借り切ってもらって、この棚にグループイベントの模様をこの壁に貼りだしたりすることができる。そうすると活動がファサード、外側に溢れ出ていくんですね。そこから人が入りやすくなってくるという状況をつくってあげようと思いました。なおかつ壁はないんですが、斜めにすることで壁っぽくみえるので、やんわり仕切ってあげることもできるんですね。あまり仕切られすぎずに、だけど必要なときは仕切ってもみえるという。そういう建物を心がけました。なので壁をつくらないということを徹底している1階になっています。で、ここは森のポケットなので、天井からトップライトから明るい光が入るようになっています。

2階が図書館、蔵書とかがたくさんあるスペースになっているんですけども、2階も普通の図書館ですと十進分類法、TSUTAYAさんですとまた独自の分類があるんですけども、一般的に十進分類法でやるとこう横一列に並んでしまうと思うんですね、図書館って。でもこう並ぶと、森のなかにグリッドの空間はないので、散策できないなあっていうのをずっと思っていたんですよ。なので、私たちが提案したのは、十進分類法を円グラフのようにしてあげて、これがいいのは自分が中心に来るとどこにでも行ける、同じ距離で。ということができるとですね。なおかつこの周りに通り抜けられる道をつくってあげる。そうすると、今哲学のところのいたんだけどその隣に行くと科学があると。いろいろな分類に偶然出会うことができる。偶然出会うことができると、新しい本に出会うチャンスがすごく増える。グリッド状に並べてしまうと、歴史の本に行こうという新しい本に出会うチャンスがなくなってしまうので、帰りがけに歩いていたらたまたまおもしろい本みつけた、みたいなそんな偶然性をつくってあげることがより自然に近い環境になるのかなというところで、回遊性のある道をつくって、分類は放射状にすることで、真ん中に来るとぐるっとみるとわかりやすい状態にもなっていて、道に迷

い込んで本当にわからなくなってしまうとそれはそれで困るので、わかんなかったら真ん中に来ると、十進分類法全部みえるので、見渡すとまたわかる。そういうふうになりやすさと、散策性というのを兼ね備えている本の並び方を提案しました。なおかつ、真ん中に賑わいがあって、周りが静かな状況になる。図書館って賑わいだけつくってもらってもきっと困ると思うんですね。やっぱり静かに本を読みたいとか静かに勉強をしたい、そういうニーズもたくさんあるので、両輪が必要だと思っています。なので、それも壁の部屋であまり仕切るんじゃなくて、なるべくグラデーションにしてあげたら、真ん中は賑わっているんだけど、その賑わいから離れると静かなスペースが自然とできていて、そこへ、静かになりたいときは自分で探してそこへ行くと。なるべく自分で散策して好きな場所を自分で探すという状況をつくるようにしました。

スライドは2階の様子です。本棚が放射状に並んでいて、散策路をたくさんつくっています。真ん中が賑やかな場所になっています。もちろん静かな場所も用意してあげるといふふうにしています。これが上からみたパースです。真ん中がおしゃべりしてもいいよという場所で、奥に行くと、みてわかるように本がいい感じに邪魔をして、静かな環境にすごくできるんですね。なおかつ、静かなほうに向かって天井が低くなっているの、自ずと居心地がいい。真ん中のにぎわうところは自ずと天井が高くてとても開放的だ。そういう人の行為というものも、自然に反映するように建築でしつらえています。そこに、先ほどいった森のポケットのところに光がところどころ落ちることで、天井を見上げたときに、本当に葉っぱの下にいるような環境を建築がつくっています。なので、自然の行為がそのままここに現れるような、建築をつくりこんでいます。

そして1階のエントランスホールですが、黒磯というのは大谷石の蔵がたくさんあるので、建築もそれを一部取り入れようということで、階段に大谷石を使って、積層された大谷石のようになっています。地元の素材をなるべくうまく活用しようということを試みています。見上げるとトップライトがあって、本当に明るくて、まるで朝日が降り注いできているかのような、そんな状況になっています。こういった光のグラデーションとか、環境をつくることで、森のなかにいるような環境をつくることを建築で提供しています。

なおかつ夜の光ということも重要で、最近夜遅くまで図書館が開いているようになっています。ここは、地方なので周りに照明がなくて真っ暗なので、本当に。なので夜の照明で人を惹きつけるということも重要だと思ったので、明るすぎない照明というものを提案しました。基本的には蛍光灯でがらがん読みやすく明るくするのですが、そうではなくて、まちの雰囲気壊さないように、がらがん明るい照明は使わない。そうではなくて、本当にぼんぼりの照明のような、ぼわんとしたやわらかな光が外にもれるような、建築で照明を考えていますので、なるべく足元はガーデン灯で演出してあげて、照明は全部天井を照らしています。天井をリフレクションして外に光が漏れるような、そんな工夫をしています。

ここからはちょっと具体的な話なんですけど、人の行為を、森の下で人がなにかをする行為と、いうのをどうやって建築に取り入れようかなという具体的な話なんですけど、黒磯というまちは、高校生がすごく元気なんです。ワークショップにもたくさん高校生が来てくれて、自分たちの居場所がないということ、すごく私に要求してきたんですね。要は子ども世代に対し

てお母さんたちには、ものすごく児童図書が充実しているんですよ。図書館というのは、いろんなところ行ってもだいたいそうなんですね。あとは、高齢者に対してとか、障害者に対してももちろんやさしいつくりになっていて、手厚いんですね。

じゃあ中高生、大学生、そのあたりの居場所というのが図書館にあるのかというと、最近ヤングアダルトコーナーとかもあつたりはするのですが、じゃあそこでなにやっているのかをみると、なんかゲームしていたり、ただしゃべったりするだけで。図書館って本来学びの場所で、学ぶことでなにかを得て、自分のきっかけになって欲しい、そんな場所になって欲しいなと思うのに、なんかただ行く場所がないからいますっていうだけで、それはどうなのかなってことをずっと思っていたんですね。高校生と話していても、聞いたら、プレゼンテーションごっこをやりたいっていうんですね。それはなにかって言うと、TEDっていうプレゼンテーションの番組があるんですが、そのように自分が発表者になって、みんなの前で発表したいっていうんですよ。結構すごいなと思ったのが、自分がなにかを考えていることを第三者に発表して評価をして欲しい。それでブラッシュアップして更に考えていることを発展させていきたいんだっていうことをいうんですよ。高校生なのにすごいなって思ったんですよ。そういうプレゼンテーションごっこを友達とやれるような場所が欲しいっていうんですよ。それしつらえてくれって。なるほどそれはすごいなって思っ。そういう人がたくさんいたので、じゃあそれを建築でつくりましょうということになったんですね。もともとのコンペのときはそういう提案はしていなかったんですが、ワークショップからすごくそういう提案が出てきたので。やっぱりまちおこしとかを考えると、若い世代が活躍しないと、なかなか活性化っていうふうにはならないので、若い世代をどうやって育成していくかというのが図書館の重要な役割だと思ったので。われわれが提案したのは、これからアクティブラーニングが今後文科省のほうでも授業で取り入れていくというのがあったので、アクティブラーニングを積極的にする場所をしつらえましょう、という提案をしました。

ここでアクティブラーニングがなにかというと、グループで討論してそれを自分たちで体験して、お互いに教え合う、お互いが先生になる。先生になって、それを成果として第三者に発表して、評価を得て、ブラッシュアップをする。その過程がアクティブラーニングの相乗効果だと思うので、それをできるスペースをつくらうと思いました。われわれが提案したのは、いろんな行為、グループ学習したり、会話したり、プレゼンテーションしたり発表するような場所をどうやってつくるかということで、1階から2階に上がるころにつくったんですけども、前にもいったように空間として部屋をつくりたくなかったので、階段状にしてつくりました。1階から2階に上がる階段がたまたま大きくなっちゃって、そこで勝手に議論したり発表したりしているような場所をつくりました。これはなんでかっていうと、とある図書館に行ったら、ヤングアダルトコーナーなんですけど、部屋になっちゃってるんですね。そうすると大人が行けないんですよ。なんか寄りづらい、学生がわいわいがやがややっていて入りづらい、という状況を目にして、こうなると多世代交流はできないなと思ったんですね。なので階段の横でそれをやってくれば、大人も入りやすいし、子どもも参加しやすいし、逆にいうと、そういうふうにしてしまうと学生が悪さをしてしまう、それを見守る管理人も必要だ、みたいな話になっちゃうので、階段のところであれば皆みてるからそういうことないんじゃ

ないですかということで、われわれは、階段がたまたま大きくなっちゃって、そこに学生が勝手に活動しているという状況をつくるということを提案しました。

このスライドがそうですね。2階に上がっていくこれが階段ですね。巨大な階段。どこを上がってもいいんですが、この巨大な階段のあちこちで学生が議論をしたり、プレゼンテーションごっこをプロジェクターでしていたりとかしている、巨大な階段スペースをつくってにぎわいを出すようにしました。大人も2階に上がる時にここを通るので、たまたまみんな、なにをやっているのか、監視じゃないですが、みることができるという。なおかつ、もちろん静かに勉強するスペースも必要だということもあったので、ガラスに区切られた奥は吸音をしてあるすごく静かなスペースをつくっています。それと、收藏っていうのも、部屋にしてしまうと奥にどんな貴重な本があるのかわからないので、このアクティブラーニングスペースの向こうが收藏スペースになっていて、これもみえるようになっていきます。收藏庫も部屋で隠すのではなくて、表にしてあげて、学生さんや若い人たちがみえるようにしてあげて、貴重な本、歴史的な本をみたいという興味を出すような、そんなしつらえにしてあります。ちょっと眺めをみると、このスライドのようになっていきます。階段状にあちこちになっていて、勝手に議論やら活動ができるような、学生さん向け、若い人たち向けの活動スペースというのを用意しました。

黒磯高校に通っている人たちって、学校終わったら行く場所がないんですね。地方はやっぱ行く場所がないので、どこにたまってるかかって聞くと、フードコートだったりとか、コンビニの前ですっていうんですね。そこでなにをやるかといったらくっちゃべっている。こういうものをつくると、ぜひここで活動をしてくれということになる、しかし活動しろっていったら、スペース与えるだけじゃ活動にならないので、運営側にいったのは、プロジェクターは最低限欲しいし、もちろんiPadやPCとか、最低限のタッチパネルとか、そういったきっかけを与えないとさすがにやらないので、それは最低限用意してくださいというふうに要求しました。裏話をいうようであれなのですが、なかなか役所というのはそういうわけにはいかないので、なかなかそういうの理解してもらえなかったのが、設計としては、「わかりました。じゃあ建築工事費のなかに入れます」ということで、入れました。やはりそこまでしないと活かされないんですよ、空間って。建築家がつくって終わりになってしまうと、そういう点が意図したものと違うので、すごくイレギュラーだったのですが、工事費のなかに入れました。やっぱりワークショップで、学生さんたちが「やりたいんだ、やりたいんだ」っていつているんですよ。大人は「わかりましたよ」ってワークショップ終わるんですよ。そのあと実現しないっていうのがワークショップの現実なんですよ。それを目の当たりにして、そうはさせたくないなという思いがあったので、だったら、項目を、あまりよくないんですが項目をちょこちょこやって、建築費のなかに。

ただ、やっぱり誰かが、大人がそういう協力者になってあげないと、若い世代が育たないですよ。だって学生にどの図書館行っても、ここではしゃべらないでください、ここでは飲食ダメです、ここでは騒がないでください。禁止事項だらけで、こんなので活動っていえるのかわかってすごく思ったんですよ。活動を促すようなことを本当にやりたいなら、禁止事項をなくせていったんですよ。なくしてルールをつくれればいい。学生はバカじゃないからちゃんとル

ール守りますよ。大人がちゃんとしたルールつくらないから、そうするんですね。頭ごなしに規制するのではなくて、皆で話し合っ運営していく体制が必要ですよって話しました。なので、ここは学生に運営させなさい、ということは今も設計側では提案しています。学生が自発的に運営していくことで、ちゃんとやれるんですよ、若い子たちは。それをやらせないんですよ、大人が。だから、私たちが今提案しているのは、黒磯高校といろいろな高校があるのですが、その高校生たちが自主的にここを管理運営する、常に綺麗にするというのをやらせようというのをやっています。こういうことはワークショップで提案があったことで変わってくることなんですよ。始めの設計からこういうことがあったわけじゃなくて、ちゃんと皆で話し合っ、市民からの声があっ変わるんですよ。だから私はまちが変わるんだなと思うので、そういうことをやらせる大人になりたいなとすごく思っ、今やっています。まだOKはしてくれないんですよ。実際はOKしてくれないんですが、まだオープンまで時間があるので、粘り強く交渉していこうかなと思っっています。

児童スペースも同じで、結構話を聞いていると遊具がいっぱいある図書館がすごく多いんですよ。それはそれで小さな子たちが来るきっかけになるのでいいんですよ。まず来ないとダメなので、それはいいんですけど、そこを真剣に遊んで帰っちゃうって子も多いので、そうじゃなくて、われわれは、児童スペースを大きく二分割にして、0~5歳で行動が違っし、6~13歳で行動が違っことでそこを大分割して、0~5歳は確かに遊びでいいと思っんですね。ぐるぐる走り回っ遊んでいるうちに、おもしろい本みつけた、これお母さんに読んでもらおうっというのでいいなと思っしたので、ぐるぐる走ってください。どうぞぐるぐる走ってもらっ、真ん中では裸足でごろごろしちゃってください。それと、子どもって小さいスペースとか狭いスペースがすごく大好きなので、穴倉の奥に秘密基地をたくさんつくっっています。この小さなトンネルを抜けると小さな穴倉スペースがあっ、なんか秘密基地のような、そんな場所をつくっっています。そこでごろごろ本を読む。公園と同じですよ。草むらのなかで寝転んで本を読む。そんな状況をつくっあげます。6~13歳には、もうちょっと大人になるとあんまりごろごろというよりは、自分で本を探しに行くことができるんですね、行動としては。それをお母さんに読んでもらおうっというように。そういった行動が多いので、発見することができるようにしつらえにしてあげて、といってもまだ子どもなので、ちょっと穴倉的なものも欲しいだろう、一部あります。ただ基本的には自分で探っ来てお母さんに読んでもらおう。この二つの児童図書の間にお母さんが本を読んであげるスペースをつくっっています。2階は大人の本がたくさんあるので、ここの階段は2階へつながるんですよ。大人へ向かう階段といっ、ここの階段の本は子どもから大人になっていく過程の本をしつらえてあげると。そういう本の置き方を提案しています。なので、行動が違っ二つの児童の間で大人が本を読んであげるスペースがあっ、子どもたちは上に行く大人への本が並んでいると。そんな成長過程がわかるようなしつらえにもしています。

あとはワークショップで「ツリーハウスが欲しい」ってさんざんいわれたんですが、建築的にやっぱりなかなか難しく、法的なこともあるし、あとは管理運営が難しいというのがネックになって。じゃあ「なんでツリーハウスが欲しいの」って聞いたら単純な理由なんですよ。高い所で本が読みたい、木の上で本を読みたいということだったので、階段を木に見立てたん

ですよ。これは建築上らせん階段なんですけど、ツリーハウスのように高い所で本を読めるような場所がいくつかあるんですね。それは実現できるので、ツリーハウスと同じ環境じゃないかということで子どもたちを説得して、大人の事情でツリーハウスはできませんよということを行いました。でも、そういう純粋な気持ちを建築に取り入れてあげたいとは思っていて、私も確かにツリーハウスで本を読みたいと思うので、それをやっぱり本当は実現したかったのですが、簡単にいっちゃうと法規的に燃える素材は使えないとかいろいろあるんですが、そのなかで実現はなるべくしてあげたいという思いから、そういう行為ができるようになっていよというふうになりました。

1階はマガジンストリートになって雑誌がたくさん並びます。本棚の一区画の箱というのも実は貸出ができるようになっていて、市民が1箱いくらで借りて、自分が展示をしたりすることもできるようになっています。昔でいう物々交換みたいな、そんな感じを取り入れようと思っています。要は、個人で6個くらい箱を借りてなにかグループで発表したり、あるいは全部箱を借りて小学校単位でなにか発表をしたり、そんなことができるような、フレキシブルな使い方ができる1階のボックスになっています。普段は雑誌がたくさん並んでいて、2階の専門書へ上がるための導入になっています。例えば、こんな感じです。通る方が、誰々さんの特集して企画展をやりますということもできるし、こういうところにiPadを埋め込められるような電源もあるので、なにかデジタルとつないで、イベントをやるようなこともできるし、例えば受験シーズンになると、iPad全部並べて上から英単語が降りてきて、みんなで英単語の当てっこするとか。そういう使い方もできるので、このタワー型の本棚の上ってどうやって使うんだいといった話もあったのですが、そういったことを、市民が使い方を考えてくれるような、そんな余白を残しながらつくっています。

駅前広場というのも重要なので、わりとここは市民が夜市をやっていたりして活動の拠点になっていたんですね。なので、それができるようなしつらえをしてあげようということで、イベントができるような、車が乗り入れられるような状態にしてあげて、図書館のホールと一体利用できるようにしつらえになっていて、休日のイベント対応というものにも、もちろん対応しています。

最後に写真を、今どういう状況かおみせします（スライド：図書館の建築の経過）。来年の3月に建築は完成します。オープンは夏になります。なにもないところからだんだんこんなふうになってきて、鉄骨の屋根がこんなふうになり上がって、こうやってみると本当に葉っぱの葉脈みたいな感じなんですけど、まさにそんな状態で、屋根ができて、2階ができて、天井が張られて、外からの感じですね。今こんな感じで出来上がっています。あとは、本棚をどんどん入れて完成に向けてやっている感じです。照明のテストなどもしています。まあこんな現場を支えているのは職人さんなので、職人さんとも毎週のようにディスカッションをしながら、われわれは地元の業者さんを全部使ってやっています。20億規模の建物なので、だいたいこういう規模だとゼネコンが入るんですが、できるだけ地元のマンパワーでやろう、ということを決めてやっています。なので全部地元の業者を使って。そうすると愛着がわいてくるので、長くメンテナンスもしてくれるし、利点はたくさんあるので、なるべく地元の素材、地元の業者、地元還元するということでやっています。

最後になるんですが、森の下でいろいろ行われる行為を建築に反映していくというのが、われわれにできるランドスケープ的な使い方というふうに考えて今やっています。ここからは市民の皆さんが本当にそういうふうに使っていくかというところが試されるなというふうに思います。以上です。ありがとうございました。

---

---

(永田)

ありがとうございます。

さっそく次の森山さんのお話をお願いします。

---

---